

北越中世文書の国語史的研究

著者	沼本 克明
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 1: 21-22(1980)
発行年月日	1980-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022343

北越中世文書の国語史的研究

中世以前の国語史の資料は殆ど全てがその当時の京都を中心とする地方で書かれたものである。従って、それ等の資料に従って描かれた従来の国語史は畿内方言の歴史であった事になる。畿内方言を中央語と位置づけるならば、その中央語史に対する地方語史の研究が課題として残されているとせねばならない。その一つの方法として各地方に残存する古文書類を言語史料として取り挙げる道が有る。その様な視点に立って、ここでは北越中世文書を当該地方の方言史料として取り挙げて検討してみた。依った資料は「影印北越中世文書」(昭和五十一年佐藤進一等編)に収められた「大見安田文書」「大見水原文書」「毛利安田文書」「斉藤文書」「発智文書」「小田切文書」「段銭日記」「雑文書」「雑集」「上杉謙信・景勝文書」「石井庄文書」の諸編である。

これ等の資料に依って知られる特徴として、語彙面に於ては、「よこほる」「まる丸（↑↓まる）」「しつもつ質物（↑↓しちもつ）」「てまい手前（↑↓てまえ）」「しんびう神妙（↑↓しんべう）」「さをひ相違（↑↓さうゐ）」等の形が見られ、音韻面に於ては、長音化に依る開合の混乱例「ようがい要害（↑えうがい）」「しんびう」、合拗音の消滅例「ゑんげん延元（↑えんぐゑん）」等の例が有り、文法面に於ては、古典文法で普通終止形（ラ変は連体形）に接続するとされる助動詞「ベシ」が連用形に接続した「申かけべからず」「かうぶりべく候」「つけべき由」が見られる、等が指摘出来る。

考察の対象として取挙げた資料は一地方の文字通り断片的なものであるに過ぎないが、今後この様な検討を範囲を広げて重ねつつ、更に現代方言との相互補定的な検討を加える事に依って、地方語史の究明が期待されるであらう。